

健康文化

ゴールドントライアングルへの旅 —タイ北部山岳林地帯の「麻薬根絶計画」見聞記—

北川 勝弘

1 はじめに

昨年(1996年)12月はじめ、タイ国北部の山岳林地帯を旅行した際に、タイ、ラオス、ミャンマー(ビルマ)三国の国境地帯、いわゆる“ゴールドントライアングル”と称される地帯の一端を訪れた。ゴールドントライアングルとは、かつて阿片の一大生産地として悪名高かった地帯で、麻薬取り引きにからんで治安が著しく悪く、ごく最近まで外国人旅行者の立ち入りが認められなかった所である。たまたま、去る2月中旬のテレビ芸能番組で、ゴールドントライアングルへの芸能レポーターによる“突撃取材レポート”を放映していた。番組中の解説によると、昨年4月からようやく一般外国人のゴールドントライアングル立ち入りが解禁されたばかりだということで、そのレポーターは「滅多に外国人旅行者が行けない場所に行けて、とても感激した」と語っていた。それが事実だとすれば、私が昨年末に同地を訪問したことも、かなり希少価値のあるものだった、と言えるかも知れない。

本稿では、ゴールドントライアングルの現況と、同地方で実施されたタイ王室による「麻薬根絶計画」について、私の見聞の一端を記してみたい。

2 タイ・ミャンマー国境の町=メーサイ

タイ最北部の大都市チェンライから4車線の国道110号線を真北に70km、バスで約1時間半ほど行ったところにメーサイという町があり、その町はずれを流れるメーコク川(ヴェトナムに流れ出るメコン川の支流)をまたぐ小さなメーサイ橋を渡れば、そこはもうミャンマー領のタチレクという町である。タイ、ミャンマー両国の人々は、日常的に自動車やバイク、あるいは徒歩で、パスポート無しでこの橋(つまり国境)を自由に行き来している。外国人旅行者がこの橋をミャンマー側検問所のところまで歩いていきたくれば、国境のタイ側検問所にパスポートを預けたうえで、手続き料(US\$6.00)を支払う必要がある。橋のたもとには、頬に金粉と墨で丸を描く、この付近の高地民族独特の

化粧をして、おそろいの赤い民族衣装をまとった10代前半とおぼしき可愛い娘さんたちが5人くらいたむろして、写真のモデルとして自分たちを写すよう、観光客に人なつこく呼びかけていた。

メーサイの中心部を走る国道の両側は、観光客や地元住民相手の小さな露店でびっしり埋めつくされ、活気にあふれていた。衣料品や日常雑貨から果物、土産物に至るまで、露店で扱われている品物の種類や品数は豊富で、老若男女の売り子の声はいずれも大変威勢がよかった。電化製品を扱う露店でふと見かけた太陽電池を用いるポケット型電卓は、日本では1,800円くらいの値段で販売されているものだったが、中国製のその値段は、何とUS\$5.00(600円)!その安さにとてもびっくりした。また、ヘルメットをかぶりスクーターにまたがった、身なりの良い中年の女性たちが、自分の店で扱うのであろうか、それぞれの商品を後ろの荷台にたくさん積んで颯爽と駆け抜けていく姿を、町中の大通りで何組も見かけた。そうした姿から、タイの経済が底辺から見事に発展してきていることを実感させられた。その反面、観光バスの出入口付近には、着ている衣装から高地民族とおぼしい女性は何人も、赤ちゃんを抱いて裸足で立ち、うつろな目で物乞いをしていた。

ゴールドトライアングルとは、冒頭にも書いたように、もともとタイ、ラオス、ミャンマー3国の国境が接する場所を指したのであるが、この一帯に広がるケシ畑から産出される阿片(オピウム; Opium)により、麻薬の産地としてその名を世界に知られている。昨今は、タイ政府の取り締まりが厳しくなり、その取引量は減っているものの、世界中の阿片の約50%が今でも生産されているという。ヴェトナム戦争の時期に米軍内で阿片が大流行した結果、ゴールドトライアングルでの麻薬取引の需要が著しく高まったといわれる。

3 ドイトゥン山のチーク造林地

このメーサイから自動車ですら30分ほど離れた山岳地帯にある、標高1,512mのドイトゥン山の山頂付近に、タイ王室の皇太后が拠出した基金に基づいて建設されたという立派な王立植物園があり、大勢の観光客でにぎわっていた。植物園の脇には大きなレストランがあって、そこも親子連れであふれていた。このレストランの2階に、「オピウム(ケシ)博物館」が設けられていた。私たち見学者は、タイの軍隊が山岳地帯のケシ畑を大きなカマなどで薙り払い、焼き払っている情景や、高地民族がケシ栽培に依存せずに生活していくためのタイ政府による諸施策などを収録したビデオを20分ほど上映してもらい、カセサート大学の社会林業が専門の先生から関連する説明を受けた。

ドイトウン山の山頂付近に立つと、タイ側とミャンマー側の森林地帯が遠望できた。いずれも、チーク林である。タイ側のチーク林は、比較的最近に植林したばかり、とのことであつた。

もともと、タイ北部からミャンマー、インドにかけては、世界で有数のチークの大森林が存在していた地域である。かつて、英国は、19世紀前半からこのチークをインドやビルマから輸入していたが、ビルマが1885年に英国系企業のチーク材伐採量ごまかしに対して罰金を科したことをきっかけとして、ビルマに軍事侵入し、翌1886年にはビルマ全土を英領インドに併合してしまったという、チークにまつわるいまわしい歴史的な事実がある。(ちなみに、カンボジャは1887年、ラオスは1899年に、それぞれ仏領インドシナ連邦に編入された。タイ自身も、仏国、英国に対して、数回にわたり領土の割譲を余儀なくされている。)

タイでは、英国および米国と1855年に通商条約を結んで以来、森林資源が国家的な重要性を持つようになり、タイ北部のチーク材が英国に好んで輸出されるようになったことから、19世紀後半から20世紀はじめの時期にかけて、チークがタイにとっての主要な輸出品目になった。その後、1950年代後半以降の国家的な経済発展を支えるための森林伐採や、1976年の軍事クーデターに伴う、森林地帯に隠れた反政府活動家を掃討するための軍隊による大量の森林伐開、等々のため、タイのチークを中心とする森林資源は急激に枯渇の道をたどり、ついに1989年には保存林における商業伐採の全面停止、すべての伐採権の取り消しをせざるをえない状況にまでたち至った。(しかしながら、それでも違法な森林伐採は今日に至るもなお続いている、ということだから、事態は深刻である。) 話を元にもどそう。ドイトウン山の山頂付近には、その地点がタイとミャンマーとの国境線となっていることを示す標識があり、観光客の何人かはわざわざミャンマー側の地に足を踏み入れて写真を撮ったりしていた。しかし、タイ側でもミャンマー側でも、国境警備隊員などの姿はそこにはなく、人から何も言われなければ、そこが国境だとは気づかずに通り過ぎてしまいそうなほど、両国の森林地帯は同じ様なチーク林で連続した風景を示していた。

ドイトウン山から国道110号線まで降る途中で、チークの種子の組織培養を行っている工場に立ち寄った。工場内の大部屋では、数十人の若い男女の青年たちがいくつかのグループに分かれてにぎやかに談笑しながら、造林用のポット苗(小さくて丈夫な紙袋に土を詰め、その中に1本の苗木を植えこんだもので、山に運びこんでそのまますぐに植林できるようにしたもの)などを作って

いた。また、別のクリーン室内では、10数名の10～20歳代とおぼしい女性たちが、試料の入った試験管を相手にして、さかんにピンセットを操作していた。その内の20歳くらいの一人の女性が、私たち見学者に仕事の内容を説明してくれた。にこにこしていて大変愛嬌があり、また説明の仕方もきちんと筋が通っており、なかなか堂々としていた。彼女が、いま自分の手がけている組織培養の仕事に大層誇りを持っている様子が、質問に対する応答の節々から、うかがわれた。

4 タイ王室による「麻薬根絶計画」

以上の訪問地について少しくどいぐらいに私の印象を記したのは、それらがいずれも、タイ王室による「麻薬根絶計画」に沿って実施された、一連の施策の成果を示すものだからである。

この計画は、正確にいうと「皇太后の指導に基づくドイトゥン開発計画」と呼ばれるもので、スリナガリンダ皇太后が88歳であった1988年に開始された。計画が始められた背景には、ドイトゥン地域（タイ北部の山岳林地帯）に住む、アカ族、ラウ族、シャン族、中国系ハウ族など、多様な種族からなる「高地民族」が、きわめて貧困な生活を余儀なくされていることが、焼き畑移動耕作や、主要な換金作物としてのオピウム（ケシ）の生産に依存せざるを得ない状況をもたらしていること、そして、それら焼き畑移動耕作やケシ栽培は、仕事の機会の不足や人口の急速な増加とあいまって、森林の一層の破壊を進行させ、治安の悪化を留まることなく進行させ、あるいは10代の娘たちを都会へ送り出して売春による収入で家族への仕送りを期待するという社会的な病理現象をはびこらせる、等々の重大な状況が存在していたことが、挙げられる。

この計画では、①人々と森林が共生しうるような方法での森林再生、②天然林のように多種類の樹木を再生させることによる環境改善、③計画地域住民の社会経済的な状況の改善、を主要な目的として掲げた。その結果として、④計画区域の豊かな発展、⑤地域住民の治安と福祉の向上、⑥貧困や麻薬の生産・中毒、環境破壊といった問題を解決するための地域開発の系統的な方法の発見、等の目的についてもあわせて期待する、というものであった。

同計画の事務局がまとめた報告書では、1988年度はじめから1993年度末までの6年間の成果について、次のように要約されている。

- (1) 森林面積の増加：計画区域全体（14,960ha）の45%（6,760ha）から81%（12,120ha）へ。
- (2) 地域住民の所得向上：1人当たり年収が3,772Bahtから12,155Bahtへ。

2002年時点での目標は、最低 30,000Baht。

- (3) 住民の生活水準の向上：教育、健康管理、交通施設、仕事の訓練、社会的サービス（水道、電気、衛生、等）の向上。
- (4) 麻薬売買の抑止：阿片生産（100%除去）、阿片や他の麻薬の使用（90%減少）、麻薬の売買（少なくとも90%減少）、麻薬の越境貿易（著しく減少）。

上記の「計画」は、造林予定地にフォレスト・ビレッジを作り、住居、学校、土地、公共施設などを参加者に提供して、「タウンヤ法」と呼ばれる特定の造林方法を用いて造林を行う、フォレスト・ビレッジ計画の一種である。このフォレストビレッジ・システムが1967年にタイの林産公社によって計画された当初の主な理由は、辺境地帯における造林のための安定的な労働力確保にあった、といわれる。それが、国内の反政府勢力との対立や、土地無し農民の増大などによる社会の不安定化を防ぐことが、タイ政府の森林地帯における重要課題となったときに、懐柔手段として、いわゆる社会林業（ソーシャル・フォレストリー）の一環としての位置づけを与えられて、採用されたわけである。

社会林業（ソーシャル・フォレストリー）とは、地域住民のための地域住民の参加による林業あるいは林地利用のことをいい、過去の植民地政府や国家が、開発利益の追求を優先し、地域住民による森林利用を制限し、地域住民の利益を無視した資源管理を行ってきた結果、森林保全に対する地域の支持がなくなって、森林が荒廃したことに対する反省から生まれた政策アプローチである。

5 最近のゴールドトライアングル

計画開始の時点では、地域住民の年間所得の49%が阿片生産と移動焼き畑耕作に、34%が労働賃金（ほとんど日雇い労働）、9%が小売り、5%が民芸品生産に基づくものと推定されていた。それが、6年後には、69%が労働賃金（大半が企業の従業員などの雇用労働）に、13%が（大半が移動焼き畑耕作方式ではない）農業、13%が小売り、その他が民芸品生産に基づくものに、それぞれ変化している。

私がドイトゥン山の山頂付近から眺めたチークの一大造林地は、この計画に基づく森林再生の成果だったわけだ。チーク造林作業の実施は、高地民族の多くの人々にとって、ケシ栽培に替わる生計の道を保証する第一段階となった。王立植物園の建設は、民芸品の生産や、レストランの給仕、その他の仕事を作り出した。チークの種子の組織培養工場で出会った青年たち（特に娘さんたち）は、その多くが以前なら、阿片の栽培・密売者や売春婦となる道をたどったであろう状況からの、劇的な人生的進路の転換を体現していたことになる。

先の「計画」事務局による報告書には、組織培養の仕事に携わる対象者として、売春のために娘たちを都会へ送り出してきた割合の高い部族や集落などに住んでいる娘を優先的に選考した、とされている。にこやかに、自信にあふれた態度で、自分たちが手がけている組織培養の仕事について説明してくれた、あの娘さんの誇らしげな表情が、とても貴重な社会的努力の産物であったことに思い至り、深い感動がわき上がってくるのを禁じ得なかった。

メーサイの町を見学した後、私たちを乗せたバスは、タイ、ミャンマー、ラオスの3国が文字通り1箇所接している地点を訪れた。そこはメコン川のほとりで、流れの対岸にミャンマーとラオスが、それぞれ指呼の間に眺めることができた。流れをバックにして記念写真を撮るのに都合が良い場所に、英語で「ゴールドトライアングル」と書かれた、大きな立て札が立っていた。そして、その付近には沢山の土産物の露店や売店が並んでいた。観光客には「ゴールドトライアングル」という地名入りのカラフルなTシャツが人気の的らしく、どの店でも大量にぶらさがっていた。

先の報告書によれば、計画開始時点で同地域を訪れる旅行者は、治安が極端に悪かったことから、「計画」事務局への訪問者を除けば全くいなかった、という。それが、1993年には40万人もの訪問客があったそうだ。かつて阿片やヘロインなどの麻薬取り引きで悪名高かったゴールドトライアングルも、今では新しい観光名所として、見事に変身を遂げたわけである。

6 おわりに

今回の見学を通じて、上記の「ドイトウン開発計画」が現実に大きな成果を収めていることを実感した。それとともに、タイ北部山岳林地帯への旅行に先立ち、バンコクのカセサート大学で開催された国際学会の開会式で体験した、王室崇拝の演出が過多の時代錯誤的な式典から受けた印象とは大変矛盾するのだが、タイ王室の（ということは、とりもなおさずタイ政府の）、国内少数民族の貧困克服に向けての社会開発に対する積極的な姿勢についても、非常に強い印象を受けた。世界中で民族間の対立が激しい政治問題となっている時期にあって、タイではそうした少数民族の処遇問題に対して、きわめて理性的かつ合理的に対処しているように見え、深い共感を覚えたのである。同計画が今後とも、ゴールドトライアングル地帯における麻薬根絶と、高地山岳民族の社会経済的な面での生活安定に向けて、着実に成果を積み上げていくことを期待したい。

(1997.4.15 記)

(名古屋大学農学部資源生物環境学科助教授)